

第15回 「ことば」フォーラム

日本語を外から眺める

2003年7月5日（土）

国立国語研究所 1号館5階講堂

金田 智子（国立国語研究所）

宇佐美 洋（国立国語研究所）

ポリー・ザトラウスキー（ミネソタ大学）

後援 北区教育委員会・板橋区教育委員会

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（小河原 義朗） それでは、定刻になりましたので、第15回「ことば」フォーラムを開催いたします。最初に、所長より御挨拶申し上げます。

甲斐所長 本日は、外は大変暑い天候になっております。そこをわざわざこの「ことば」フォーラムのためにおいで頂いてありがとうございました。この国立国語研究所は、こうやって「ことば」フォーラムに取り組み始めて今回で15回目を迎えております。1年に2回はこの講堂で行うことになっております。また、地域の方々にたくさんこうやっておいで頂いたことについて、私どもは大変ありがたく思っております。今回は、北区の教育委員会、それから板橋区の教育委員会の御後援を頂戴しました。たくさんの方の広報紙等にも載せて頂きまして、私どもの「ことば」フォーラムについてのご理解を頂けるようにいたしました。そのことについて感謝申し上げます。それから本日は、私どもが毎日使っている日本語について、外から眺めるとどうなるかということについて、4人の研究員が発表いたしますわけでありまして、皆様も外国の方とお話しになったことがあると思いますが、私どもが何らかの形で話をするときには、ある時は日本語について、何とも言えない劣等意識に悩まされたり、あるいは優越意識にとりつかれたりするということが、なかなか平常心というのを保つことが難しいわけがございます。そのところを、日本語を外から眺めるとこうなるということについて、発表するということになっております。今4人の人がと申したのですが、その中の最後のポリ・ザトラウスキーさんは実はミネソタ大学の先生であります。今、研究のために日本に来ていらして、大変日本語の分析に優れた方でいらっしゃいますので、そのポリ先生にもお話をいただくということでもあります。最後に質問コーナーも設けておりますので、どうぞ質問用紙に御記入の上、御質問いただければと思っております。それから本日は、こうやって手話通訳の方が私どもの話をそれぞれ手話で説明してくださっております。また、そのことで何人かの方が聴講してくださっております。大変ありがたいことだと思っております。これから4時まででありますけれども、発表を聞いていろいろなことをお考えいただいて、会場からまた御質問いただければというように思っております。国立国語研究所は、北区と板橋区の境目にあるこの土地におられますのが、あと2年足らずになってまいりました。2年経ちますと、私どもは立川のほうに移転することになっております。それまでは、できるだけ私どももこの地域の方々と仲よくして、日本語について、いろいろお話をしていきたいと思っております。以上、開始にあたりまして御挨拶申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

司会 申し遅れました。本日、司会進行は、当研究所日本語教育部門の小河原と申します。よろしくお願いいたします。早速、本日の本題に入りたいと思いますが、その前に、今日のフォーラムのテーマについて簡単にお話しさせていただきます。当研究所では、日本語について考える機会をとということで、『新「ことば」シリーズ』という冊子を毎年

一冊刊行しております。昨年度のテーマは、御覧いただいておりますとおり「日本語を外から眺める」というテーマで、本日のフォーラムでは、このテーマの中から特に「日本語と外国語を比べる」ということではなくて、「日本語によるコミュニケーション」を中心に取り上げて考えてみたいと思います。具体的に申しますと、普段日本語を使って当たり前のように何げなくやり取りをしている、生活をしているわけですが、そうすると、いわゆる日本語についてのやり取りについて余り振り返るということはないのではないかと思います。そこで、この日本語によるコミュニケーションというものを別の視点から眺めてみることによって、普段気づかないことに気づくということがあるのではないのでしょうか。今日のフォーラムで、この別の視点というものをどういうふうにとらえるかということですが、近年、身の回りに、あるいはテレビ等で日本語を使って話す外国の方々が増えてきているとお感じになっている方もいらっしゃると思います。現在日本で暮らす外国の人々は 100 人に 1 人とされておりまして。こうなりますと、外国の人々と実際に日本語を使って話すという機会もふえてくるかと思いません。会場の中にも、実際に対面して話をしたという御経験がある方もいらっしゃるかと思います。ここで、実際に外国の人と日本語を使って話すという機会をちょっと想像していただきたいのですが、そのときに、うまく伝わらないとか、ちゃんと通じたのかなとか、あるいは何か変だなというような、違和感というものを感ずることがあるのではないのでしょうか。この違和感というものは、私たち話している側の視点なわけですが、この視点をちょっと逆にとらえてみて、相手の外国の人々の視点から見ると、一体どういふふうに感ずるのだろうか、どのように思っているのだろうかということが見えてくるかと思いません。例えば、何か物をあげたり贈ったりというときに、日本語では「つまらないものですが」ということを言ったりします。このときに、例えば日本語の勉強を始めた外国の方にとってみれば、この「つまらないもの」というものを文字どおりにとらえて、どうしてつまらないものをわざわざくれるのだろうか、と感ずるかもしれません。このように、普段何げなく使っている日本語のやり取りというものを別の視点、ここでは外国の人の視点に立って見てみることによって、余り気づかないものに気づくのではないかと。どうして私たちはこういう表現を使うのだろうかというような、考える機会になる。さらには、そういったお互いの違和感というものを乗り越えて、より豊かなコミュニケーションというものにつながっていくのではないかと考えました。そこでまとめますが、外国の人々、また日本語を勉強している学習者の視点から、日本語によるコミュニケーション、日本語のやり取りというものを文字どおり外から眺めてみることによって、日本語のおもしろさ、日本語によるコミュニケーションの難しさといったものを見てみよう。そうすることによってより豊かなコミュニケーションに結びついていくのではないかと考えまして、本日のフォーラムを企画いたしました。このようなことから、今日のフォーラムでは、外国の人々とのやり取りといった場面をた

くさん具体的に上げたいと思います。その上で、外国の人の視点、それから自分の視点、双方から日本語についてのコミュニケーションについて考えていきたいと思ます。まず最初に、外国、あるいは日本語を勉強している人の視点から、「日本語の勉強って楽しい？」という題で、当研究所日本語教育部門主任研究員の金田から話があります。それを受けた上で、もう一度自分たちの視点に帰ったらというところから、「違和感はあるためのきっかけ」と題して、同じく日本語教育部門研究員の宇佐美から話があります。その後を受けまして、先ほどご紹介がありましたポリ・ザトラウスキーさんから、実際に日本語を勉強したという立場、それからご自分の研究の立場から、日本語についてのコミュニケーションについてコメントをいただきたいと思ます。最後に質問コーナーをつくっておりますので、是非よろしくお願いたします。それでは、金田さん、よろしくお願いたします。

「日本語の勉強って楽しい？」金田 智子 (配布資料 : p. 2 ~ 5)

金田 こんにちは。当研究所の金田智子と申します。今日はこのようにたくさんの方に集りいただきまして、ちょっと緊張していますけれども、よろしくお願いたします。まず、ちょっとリラックスも兼ねまして皆さんにクイズをお出ししたいと思ます。日本語を外国語として学習している人数の多い順に、この四つの国を並べていただきたいと思ます。ただ、クイズ番組のように四つを並べ替えて、それをぱっと示すというような機械はありませんので、この中で一番日本語を学習している数が多い国をちょっとお考えいただければと思ます。ちょっと手を挙げていただけるでしょうか。中国だと思われる方。随分手が挙がりました。韓国だと思われる方。多いですね。タイだと思われる方。少し挙がりました。オーストラリアと思われる方。これも少し挙がりましたね。この答えは、このあと私の話の中で皆さんにお答えしていきたいと思っております。では、次の質問です。先ほど小河原さんのほうから、国内に日本語学習者、あるいは外国人が非常に増えているという話が出てきましたけれども、現在国内に日本語学習者はどのくらいいるでしょうか。これもちょっと手を挙げて頂けますか。3万人ぐらいと思われる方。13万人…。実は先ほどの小河原さんの話の中に答えがあったというふうにも考えてもいいかもしれません。100人に1人というふうに言っていましたので。選択肢は、30万人、130万人というふうにありますけれども、実はこれの答えは13万人です。3番目の質問です。現在使用されている日本語教科書の名前がないものは、以下の四つのうちどれでしょうか。「げんき」だと思われる方、ちょっと手を挙げて頂けますか。「ようこそ」。「はい」。「日本語ぺらぺら」。大分手が挙がりましたね。では、これもまた話の中で答えを出していきたいと思ます。今日の私の話では、まず日本語がどのような方によって、どのような内容について、どのような方法で学ばれているのかをご紹介したいと思ます。その後で、そういった学習者たちが経験する日本語によるコミュニケーション

の難しさについて触れていきます。それから今日の私の話の中では、日本で生まれ育って、日本語の環境の中で自然に日本語を習得していった方々を、便宜的に「日本人」と呼ばせていただきます。そして日本語以外の言葉をまず先に身につけて、そして日本語を新たに勉強している、そういう方を「日本語学習者」と呼ばせていただきたいと思えます。まず、どういった方が日本語を学んでいるかですけれども、例えばそれを考えるときに、市販の教科書がどういった分類をされているかというのが参考になるかと思えます。ある日本語教育関係の教材リストを見ますと、こういった方のための教科書というものがあります。留学生、ビジネス関係者、技術研修生、それから短期滞在者向けの教科書、あるいは子ども向け。そして特に対象を定めないものとして、「総合教科書」と呼ばれているものがあります。これが最も一般的な教科書と言っていいかと思えます。これらの分類があるということは、こういった方々が非常に多いということを表しているかと思えますが、これ以外に、例えば配偶者ですとか、中国からの帰国者、そして日系人といった方もいらっしゃいます。国内に現在どのぐらいの日本語学習者がいるかですが、文化庁が行っている調査によると、2001年には13万2,569人の人が日本語を学習しているというふうになっています。これは、国内各地の日本語教育実施機関、あるいは実施施設で日本語を学習している人ということです。この数を10年前、1991年と比べてみますと、6万2,895人です。この10年間のあいだに2倍以上の学習者増があったということが言えるかと思えます。ただ、この数字には、小学校・中学校などで日本語指導を必要とする児童・生徒の数は含まれておりません。ちなみに文部科学省が行った調査によりますと、平成14年、昨年ですね、の9月現在、公立の小学校・中学校・高等学校、そして盲学校・聾学校・養護学校などで日本語指導が必要だとされている児童・生徒が1万8,734人、約2万人いるというふうに調査結果としては出ております。それから学校や、あるいは地域のボランティアによる日本語教室などに通わずに、自分で勉強しているとか、個人指導を受けているという人の数は、この数字にはいずれにしても含まれませんので、実際にこの国内には日本語を学んでいる方というのはもっとたくさんいるのではないかと考えられます。では、海外はどうかですが、こちらは国際交流基金が行った調査の結果です。ちょっと数字が古いのですが、1998年には約210万人の方が日本語を学習しているという結果が出ております。これも10年前をさかのぼってみますと、73万3,802人となっておりますので、このときから10年の間に約3倍近く学習者が増えたということが分かります。以上の二つの調査結果を見ますと、国内と海外、いずれにおいても日本語の学習者が非常に増えているということが言えると思えます。では、海外のどの国で日本語が多く学習されているかですが、一番多いのは韓国です。94万8,104人の方です。そして、オーストラリア、中国、台湾、アメリカ、インドネシア、ニュージーランド、そしてタイになっています。それぞれの国の人口を考えますと、例えば韓国は50人に1人の方が日本語を学習しているという計算になります。

す。そして、オーストラリア、ここも 60 人に 1 人が日本語を学習しているのです。これを見ますと、日本語の学習熱がこれらの国で非常に高いということがお分かりいただけるかと思います。これに比べますと、人口が非常に多い中国での日本語学習者数がちょっと少ないのではないかと思われる方がいらっしゃるかと思います。実はこの調査は、日本語教育機関、あるいは施設の日本語学習者数だけを数えているものですので、個人的に勉強しているとか、あるいはラジオを使って勉強しているというような方の数は入っていません。ですから、中国ではもっと数多くの方が日本語を学習していると考えられています。ちなみに国内の日本語学習者数、約 13 万人のうちの 5 万人は中国からいらした方だというふうな調査結果が出ております。それから海外の日本語学習者に関して、もう 1 点御紹介します。海外では最近、小学校・中学校・高等学校などで、日本語が授業科目として採用されているところが増えております。そのため、この 1998 年の調査によりますと、学習者の内 65%の方が小学校・中学校・高校で日本語を学習しているということになっております。このように日本語を学習する人が非常に増えてきたわけですがけれども、彼らはなぜ日本語を学習するのでしょうか。いくつかの調査を見ますと、次のような目的、動機が主な項目として挙がっております。まず、日本語そのものに対する興味。そして、日本や日本文化に対する興味。生活上、職業上、あるいは学問上の必要性、こういった中に日本に留学したいという動機も入ると思います。それから、異文化理解。これは日本文化に限らず、自分の持っている文化と異なる文化を知りたいということです。それから、情報収集、旅行、外国語学習の必要性、そして、父母あるいは家族の希望。最後は教養として身につけたいというものがああります。この項目の中で、情報収集というのが最近の非常におもしろい傾向ではないかと思います。これは、日本語で書かれたもの、例えば本・雑誌・新聞などがありますけれども、そればかりではなくて、例えば最近ではホームページなどを見て最新の情報を得るということをしている人もいるということです。こういったことを目的に日本語を学習したいと考える人が最近増えているという調査も出ています。それでは、実際にどういったことをどういった方法で勉強しているかということを知るために、今日は特に教科書を見ながら話を進めていきたいと思っています。今日は 3 冊を紹介します。まず、「みんなの日本語」、これは日本の国内外で非常に広く使われている教科書です。一般社会人向けです。2 冊目は、「日本語ペラペラ」、これは先ほどのクイズにも出てきましたが、この名前の教科書は実在しています。これは、韓国の外国語高校で使用されています。それから、3 冊目、「はい、いま！」というタイトルの教科書です。これは、オーストラリアの中学校、あるいは高校で使われています。ここで、先ほどのクイズの答えを確認したいのですが、教科書の名前にはいろいろなものがあります。例えば国内で出版されているものを紹介しますと、「日本語の基礎」、「文化初級日本語」、「日本語初歩」、「みんなの日本語」、「Situational Functional Japanese」、それから「げんき」というようなものがありま

す。もうお気づきだと思いますが、教科書の名前の中に「日本語」という言葉が入っている場合が多いんですね。その中で比較的新しい教科書である「げんき」というのは、国内で出版されているものの中では非常に珍しい命名をしたと思います。では、海外ではどうかですが、例えば「ようこそ」、「きもの」、「おべんとう」、「未来」、「高校生活」、「はい」、「いま」というような名前の教科書があります。先ほどの国内の教科書と比べますと、非常にユニークな命名がされているということにお気づきになるのではないのでしょうか。これは、教科書をつくった方にぜひ、どうしてこういう名前にしたのかということをお聞きしたいなと思うのですが、これは多分やはり日本語ですとか日本語学習、あるいは日本に対する考え方が反映されているのではないかと思います。では実際に、先ほどご紹介した3冊の教科書の表紙、それから中身を見ていきたいと思いたす。これが1冊目の教科書、「みんなの日本語」というものです。これは韓国の教科書です。「日本語ペラペラ」で、こけしの写真が使われております。これは3冊目、一見雑誌かと思われるような表紙なのですが、これはオーストラリアで使われている「はい、いま」という教科書なんです。高校生か中学生らしき人の写真が多く使われています。この「はい、いま」の教科書の中を少しご覧いただきたいと思いたす。これは、ある課の1ページ目ですが、「歩こう、広島」という名前の課になっております。これだけ見ると、観光地のパンフレットのようなものになっていますが、この教科書の特徴として、写真、絵が非常に多く使われており、実はすべてのページがカラー印刷になっています。そして、例えば会話を示す場面でも、このように男の子の漫画、そして、ブタなんですね。人間とブタがしゃべっているという状況になっています。それから、ちょっと見づらいかと思いたすけれども、皆さんも携帯を多くお使いになると思いたすが、この教科書では、日本で携帯が必需品になっているということで、そのことについても触れています。携帯の中にはメールがこのあたりに、ここら辺に写っております。教科書についてももう少し比べてみるために、ある表現がどのように教科書の中で紹介されているかを見ていきたいと思いたす。「まっすぐ行ってください」、この表現は様々な教科書で大体取り上げられている事柄ですが、例えば1冊目の教科書はこのような会話です。この会話をご覧になって、このやり取りがなされている場面がどういったところかというのは、すぐお分かりかと思いたすが、いかがでしょうか。このタクシーの中で、運転手とカリナさんという外国人がやり取りをしているという場面です。そこで、カリナさんが運転手に、「まっすぐ行ってください」というふうに行き先の指示を与えているというところなんです。そして、2冊目です。ここは、ジニさんという方と警察官が会話をしているというところで、道を尋ねて教えてもらっているという場面に、「まっすぐ行ってください」という言葉が出てきます。では、3冊目です。AとBの会話になっておりまして、これだけ見るとだれとだれの会話かが分からないと思いたすが、先ほどの2冊目の教科書と同じようにどうも道を聞いて教えてもらおうというところを表しているよ

うです。この3冊の教科書が非常に似た場面を扱っているということがわかったかと思いますが、それを教科書の中のほうでちょっと見てみたいと思います。ちょっと文字は見づらいかと思いますが、このページでは、先ほどの会話がページの中心を占めていて、その下に、その状況が分かる絵がついています。ちょっとズームをしてみます。これで、タクシーの中の会話だということがお分かりいただけるかと思いますが、最後はどうもお金を払っているようです。それからこれは、2冊目の教科書です。ジニさんと警察官が会話をしています。道を聞いているということが、このイラストでも分かると思います。これは3冊目のオーストラリアの教科書ですけれども、これを見ますと、最初の1冊目、2冊目と随分違う構成になっていることがわかると思います。広島に行った方はすぐお分かりだと思うのですが、これは広島の平和公園あるいは原爆ドームの辺りの写真です。この中には、路面電車なども描いてありますが、この絵が中心になっているんですね。その中に、警察官と、中学生か高校生かと思われる女性3人がやり取りをしている写真が入っています。そして、その両者の間で交わされる言葉が、漫画の吹き出しのような形で入っています。先ほどの2冊と比べますと、この文字、あるいは言葉の使い方が随分違うということがお分かりいただけるかと思いますが、そして、この3冊目の教科書の一つの特徴だと思いますけれども、ここでは「広島」というのが一つの課の題名になっておりまして、ここでも示したように、原爆のドームなどが写っていますので、当然授業の中で、広島のこと、原爆のことなどに触れるということが予測できます。これに対しまして、1冊目、2冊目等の方は、どちらかという、「まっすぐ行ってください」という言葉がどういう場面で使われるのか、どのように言ったらいいのかというようにことを強調していると考えられるかと思いますが、以上の3冊は会話の流れは非常によく似ているのですが、例えば先ほどの2冊目の教科書には一つの特徴があります。先ほどの会話は警察官とジニさんのやり取りでした。でも、この教科書では丁寧な表現と同時に、友だち同士が使うような非常にくだけた表現も紹介されています。これは、警察官とジニさんとの会話と全く同じ流れなのですが、表現が違うのにお気づきいただけるかと思いますが、「です」「ます」というような言い方は全く使われておりません。「まっすぐ行ってください」ではなく、「まっすぐ行って」というふうに言っています。以上、簡単ですが3冊の教科書を比べてみました。このように比べてみますと、例えば絵の使い方が随分違ふとか、あるいは日本に関する情報の扱い方が違う。あるいは、くだけた表現や丁寧な表現の扱い方が違うといった違いに気がつくのではないかと思うのです。ここから一つ言えることは、学習者の背景、あるいは学習目的などによって、学習の内容、あるいは方法が随分異なるのだということです。日本語教育という言葉ですべてを語るということは、できにくいと思います。それからちょっと気をつけなくてはいけないのが、先ほど韓国で出版されているものですか、オーストラリアで出版されているものというふうに御紹介しましたが、韓国の教科書はすべてこ

うであるとか、オーストラリアの教科書は全部こういうタイプであるというふうに一般化して話すことはできません。そして冒頭のほうで、学習者の対象別に教科書が作られているということを申しましたが、例えばビジネス関係者であれば、ビジネスの場面に使われる表現とか単語を優先的に学習しますし、留学生であれば、それぞれの専門分野で必要とされる学術的な表現とか能力が身につくように教科書もつくられています。このように様々な工夫のもとに、多くの方々によって学習される日本語ですが、果たして日本語の勉強というのは楽しいのでしょうか。中には、日本語の勉強なんて楽しくないでしょう、余りおもしろくないんじゃないのというふうに思う方もいらっしゃるかもしれません。よく難しいと言われるものには、例えば漢字、敬語、助詞、アクセントなどがあります。ただ、これはどんな勉強でもそうだと思うのですけれども、難しいなと思う時期もあれば、それがだんだんおもしろくなっていくというような場合もあります。あるいは、最初からおもしろくてたまらないというような方もいらっしゃるかと思います。個人差はもちろんあると思うんですね。ところが、ほかの勉強と違まして、言葉の学習というものには一つ特徴があります。それは、学習のためにはコミュニケーションが欠かせないということです。そのためなのですけれども、コミュニケーションそのもので経験したことが学習を進めたり、逆に停滞させたりするということがあるのです。では、学習を停滞させるものにはどんなものがあるかということをお話したいと思います。ここで今御紹介するのは、日本人と日本語学習者、あるいは外国人の間のコミュニケーションで起こった出来事として、私自身が留学生に経験を語ってもらった中から出てきたものの例です。例えば、私たちは「おまえ」というような言葉を使うことがあります。これは、仲のいい男性同士ですとか、あるいは親子の間などでよく使われる言葉ですが、この言葉にある親しさよりも、ぞんざいさであるとか、あるいは見下されたような感じがするというところに強く反応する学習者もいるようです。例えばホームステイ先のお父さんが非常に親しくなってきた、「あなたはもう自分の娘も同然だから、これからは『おまえ』と呼ぶよ」というふうに言われることがあるようです。ところが、そういうふうに言われた人は、親しさを表す言葉であるということは頭では分かりながらも、どうも失礼な感じがするとか、ぞんざいな感じがするというふうに思うことがあるようです。それから先ほど小河原さんの話の中で、「つまらないものですが」という表現が取り上げられていました。日本人の言葉の特徴としてよく挙げられるものに、「何もありませんけど」というのがあります。私たちが食事をするとき、食事を外国人に出すときに、よくこういったことを言うてしまうわけなのですが、それを聞いて、何もないと言ったけれども随分たくさんあるなと思うとか、あるいは逆に、本当にあまり何もないなと思うとか、受けとめ方にはいろいろあると思うんですね。でも、それを謙虚な態度であるというふうに考える場合、あるいはそういうふうに言って、私に精神的に負担を感じさせないようにしようと思っっているのだと解釈できる場合もありますが、ち

よっと不誠実ではないかな、言っていることとやっていることは別ですねというふうに考える場合もあるようです。それからこれも食事の場面なのですが、日本人は食事のときに、おいしい、おいしいという言葉を書連発する傾向があるようです。これは、アジアのある国からの学習者の留学生が指摘して、ほかの国から来ている、欧米から来ている学習者も同感をしていたものなのですが、日本人に食事を出すと、つまり自分でつくってご馳走してあげると、おいしい、おいしいということをもう何度も何度も言うらしいんですね。ただ、何度も何度も言われると、本当においしいと思っているのだろうかとか、あるいは、そんなに言わなくてはいけないということは、私は逆にご馳走してもらったらおいしいと言わなくてはいけないんだなあというふうに、義務のように思ったりするということがあるそうです。そして最後もまた食事の場面で、食事の場面ばかり選んで申しわけないのですけれども、お箸に関してです。これは、お箸というのは非常に日本文化的なものだというふうに思っている方も多いのですが、ところが、中華料理ですとか韓国料理は、欧米系の方々も随分楽しんでいらっしゃるものです。ところが、欧米系の方がお箸を上手に使っていると、つい日本人は誉めたくなくなってしまうようなんですね。それで、「お箸、使えるんだ」というふうに非常に驚いて、感歎を示して言うてしまうことがあるわけなんです。それを聞いた留学生あるいは外国人の方は、誉めているのだろうか、ばかにしてるんじゃないのというふうに思ったりすることがあるそうです。ある留学生は、こういった経験を紹介してくれたときに、「お箸を使えなかったらご飯が食べられないでしょう」というふうに言い返そうかと思ったと言うんですね。でも、言い返すと、相手が気分を悪くするといけけないので、静かに笑うだけだったというふうに言っていました。こういった例はまだまだたくさんあるのですが、学習者はこういう困難を感じたとき、あるいは違和感を抱いたときに、どのようにしているのかということをおちょつと御紹介します。例えば、何か変だなと思ってもそのまま放っておく（1番）。次に、どうもこの言葉や行動についての感覚が、日本人と自分とは違うんだなというふうに考えて、そしてその違いを調べてみたり、あるいはほかの人に説明してもらったりというようなことをするということです。違いを理解しようとする態度ですね（2番）。それから三つ目は、やり返すというものです。先ほどの「お箸が使えなかったらご飯食べられないでしょ」というふうにやってしまうとか、あるいは、「おまえ」の例でもあるのですけれども、いつも同級生に「おまえ、おまえ」と呼ばれていて非常に気分が悪かったから、自分も逆に「おまえ」というふうに言い返したら、なぜか同級生は怒って「おまえ、今なんて言った？」というふうに言ったということが、ある本に例として挙がっていました。これは、自分の不快感を相手に伝えてやり返すというやり方です（3番）。それから、自分の方法を変えない。自分の持っている言葉、あるいは文化を、慣れている方法を、日本語あるいは日本の社会の中でも使っていくというものです。例えば、「何もありませんが」というふうに言うかわりに、「おいしくでき

たから、ぜひ食べてください」というふうにするなどですね（４番）。そしてこれは非常に残念なこととも言えるのですけれども、コミュニケーションをする上でいろいろ不快な思いもしたり、違和感を覚えたりということで、そういった嫌な思いをするような相手とはコミュニケーションをしないとか、あるいは嫌な思いをするかもしれない場面には行かないというふうにしてしまう方もいるようです（５番）。例えば先ほど食事の場面ばかり出したのですけれども、ある留学生は、食事の場面ではどうも不快なことが多いから、同級生とはあまり食べにいきませんというふうに言っていたことがありました。ここで挙がっている、１番・２番・５番というのは、コミュニケーションの相手である日本人はなかなか気がつかないものなんですね。日本語学習者の方だけが違和感を抱いたり、あるいは不快な思いをしたりというようなことで、そのまま注目されずに終わってしまうということもあります。ところが、３番・４番というのは、やり返された日本人、あるいは日本のやり方とはちょっと違う方法で言葉が伝わってきたというようなことで、その違いに注目するということがあります。これは、学習者と接する人、つまりここでは一応日本人と言わせていただきますけれども、その日本人にとって、日本語、無意識に使っている日本語について考えるいいきっかけになるのではないかと思います。今日の話の前半でもお伝えしたように、日本語を学習する人というのはかなり増えてきました。そしてこれからも、どんどん増えていくということが予想されます。これはつまり、日本語の使い手が多様になるということです。使い手が多様になればなるほど、自分以外の人の使う日本語が気になる機会というのは増えていくかもしれません。ただ、これは困ったことではなくて、むしろ私たちが無意識に使っていた表現ですとか、日本人の行動について、改めて考えてみるいいきっかけになるのではないのでしょうか。そして、日本語について疑問に感じ、それをきっかけにして別の表現を使ってみる。これは、例えば先ほどの「何もありませんが」のかわりに、「おいしくできたから、ぜひ食べてみて」というふうに言われて、ああ、こういう表現もなかなか正直でいいな、自分の気持ちをそのまま表しているいいかもしれないなと思って、私もちょっとこんなふうに言ってみようかというふうを考える場合もあるかもしれません。そしてまた、日本語のおもしろさですとか、日本語の奥の深さのようなものに関して、同意することもできるかもしれません。いずれにしても、日本語をまた別の視点から見直すということによって、これから日本語はますます豊かなものになっていくのではないのでしょうか。以上、私の話はここまでということで、ありがとうございました。（拍手）

「違和感はあるためのきっかけ」宇佐美 洋 （配布資料：p. 6～9）

司会 続きまして、「違和感はあるためのきっかけ」と題しまして、同じく日本語教育部門研究員の宇佐美から話があります。お願いいたします。

宇佐美 宇佐美洋でございます。本日は、「違和感はあるためのきっかけ」という題目で

お話をいたします。それで、このお話に入る前のきっかけといたしまして、ちょっとビデオのシーンを一つお見せしたいと思います。私どもの研究所では、毎年言葉に関する問題を一つ取り上げて「ことばビデオ」というビデオ番組を1本つくっているのですが、私どもの研究所も法人化しましたので、商売をしないといけないので、一応ここで御紹介しておきます。ロビーのほうにも出ておりますのでご覧ください。これからお見せするのは、「ことばビデオ」の1本目ですね。「相手を理解する一言の背景を見つめると」という、こういう題名で出ておりますビデオの1シーンです。

<ビデオ上映>

(回想シーン、習字の授業)

先生：「では、本日はこれで終わります。」

留学生(先生のところに行って)：「先生、今日の授業はよくできました。」

(先生、あきれた顔になる。回想シーン終わり)

留学生(友人に)：「先生、返事をしてくれませんでした。なぜですか？」

<ビデオ終了>

宇佐美 こういうふうはこの学生さんは悩んでいるわけですね。どういうシーンかという
と、これはお習字の授業だったと思うのですが、その授業が終わって、学生さんが先生の授業は非常によかったと思ったんですね。ですので正直に、「先生、今日の授業はよくできました」というふうに、この中国人の学生さんは言ってしまったんですね。それで、先生が非常に変な顔をして、眉にしわを寄せて。学生さんは、なんで先生がそんな顔をするのか全然分からない。それで困っているというふうなシーンです。これはしかし、日本に生まれ育った者、日本の文化の中で生まれ育ってきた者にとって、「先生、今日の授業はよくできました」と言われたら、やはりこれはちょっと問題があるという違和感を持ってしまうような表現だと思うんですね。ではなぜここで違和感を持ってしまうのでしょうか。「よくできました」という言い方がいけないのでしょうか。その表現に問題があったということなののでしょうか。それとも、そもそも日本では、先生を誉めるということ自体がいけないんだ、というようなことも考えられるかもしれない。今日は、こういうふうなことについて、さっきのビデオをきっかけに、いろいろなことを考えていきたいというふうに思っております。先生が一体、ここでどういうふうなことを思ったのかということをおそらく想像してみましよう。先生は、おそらく、「学生のくせに失礼な、偉そうに」というふうなことを考えたのだらうと思うんですね。なぜこういうふうな感想が出てくるのかということ、これは、先ほども言いましたけれども、「よくできました」という表現に一つの問題点があるのだと思います。「よくできました」というのは日本語では、目上の者が目下の者に対して何か言ってあげる、小学校の先生が生徒に対して言ってやるというふうな言外の意味を持ってしまう表現だということが言えると思います。ところが、ではこの中国人学生は、先生を目上の人とは考え

ていなかったのかどうか。これは多分違うだろうと思うんですね。先ほどの画像を見ていただいておわかりだと思うのですが、先生に向かって中国人の学生さん、かなり丁寧におじぎをしていました。ああいう態度を見ても、この学生は先生が尊敬すべき目上の人だということは分かっている、そのことを態度ではきちんと表していたんですね。ただ、言葉の上でそれを十分に表すことができなかった。では、なぜこの学生は、「よくできました」というふうに言ってしまったのかということ、違和感を持ってしまった我々、日本語を母語とする人間の側としても考える必要があるだろうというふうに思うのです。ここで、もう今日の結論を先に言ってしまいます。違和感をきっかけに考えましょうというのが、今日の結論です。ここに、こういうおじさんがいます。非常になんか意地悪な顔のおじさんですね。ここにおじさんがいて、ここで何か言いました。あるいは、ある振るまいをしました。それに対してこの男の子が、なんか違和感を持った。場合によっては、これは不快感であるかもしれません。「なんだ、このおっさん、なんでこんなことを言うんだ」というふうに思ったとします。ここで、他者というのは必ずしも外国人、日本語を勉強している人に限らないと思うんですね。同じ日本人同士であってもいいと思うのです。何か、とにかくほかの人の行動、言葉に対して違和感、あるいは不快感を持ってしまった、そういうときに、それ、間違っているよと、そう言うのも一つのやり方だとは思いますが。違和感を感じた他者の言動を否定してしまうということですね。しかしそれでは何も発展はないでしょう。場合によっては、このおじさんを怒らせてしまって、けんかしてしまって、それでもお互いに更に不愉快な気持ちになっておしまいになってしまうということになるかもしれない。そうではなくて、「何でおかしいと感じるのだろうか、自分がこのおじさんの行動に対して違和感とか不快感を持ったのは、一体どうしてなのだろうか。」と、自分に引きつけて考えてみるということが大事なのではないかと思うのです。あるいは、相手の立場に立って考えてみるということも必要だと思うんですね。なんでこのおじさんは、ここでこういうふうなことを言ったのだろうか。言葉とか行動の裏側にあるものは一体何なのかということ、を想像してみる。それが新しい発見につながるだろうということ、を申し上げたいわけです。このことは決して、違和感を感じてもそれをもの分かりよく、相手の言動をすべて受け入れてしまいなさい、肯定してしまおうというふうなことでは決してないのです。考えた末、やっぱりこのおじさんおかしいねと、この人の行動はおかしいよというふうに思うかもしれない。それはそれでいいのです。相手側の皆もいろいろですから、ほかの人の行動や言葉に対して違和感を持つのは自然なこと。でも、なぜ、自分は相手の行動に対しておかしいと感じたのかということ、をよくよく考えておくということによって、なぜ自分は、あなたのこの行動に対して嫌だと思ったのかということ、をきちっと説明してあげることができるわけですね。そういうことをよく考えてみることによって、このおじさんとこの男の子のあいだで一応会話が成り立つ、コミュニケーション

ンが成立する。それで、またさらに新しい発見が出てくるということがあるかもしれない。決して、相手の言動をもの分かりよくすべて受け入れてしまいたいということではないということに、ご注意ください。さて、ここで質問です。いきなり質問になりますけれども、これは皆さんに対する質問ですね。先生と、部屋の中で2人きりになりました。あなたは先生に話しかけますか、という質問です。こういう質問を、私の部屋に来てもらっているアルバイトの人に聞きましたら、いや、それは先生によるというような答えが返ってきて、「なんとか先生だったら話しかけるけれども、なんとか先生だったら無視してやる」って、なんかそういう固有名詞を挙げての生々しい話になってしまっていて、それも困るので、もうちょっと状況が分かりやすいように詳しく説明します。この先生というのは、あなたよりかなり年齢が上です。偉い先生ということはいく分かっています。ただし、お互い余りよく知りません。先生とあなたの間で、顔と名前ぐらいはお互いを知っているのですけれども、個人的にどういう人か、人間的にどういう人かということは余り知らない先生と二人きりになりました。余り広い教室ではありません、しばらく人が来そうにありません、という状況です。こういう状態で、あなたは先生に話しかけますか。話しかけるといふ方、どのくらいいらっしゃいますか。はい。半分ぐらいでしょうか。話しかけないという方。ああ、一番いい結果ですね、ちょうど半々ぐらいですね。ありがとうございます。話しかけるといふ人、話しかけないという人、どちらもいらっしゃると思うんですね。それで、なぜ話しかけるのか、なぜ話しかけないのか、理由もいろいろだと思うのです。ここで、仮にAさんという方がいて、この人は話しかけないというほうの考えを持っている人だとしますね。そのAさんの話しかけない理由について想像してみると、こんなことが言えるのではないかと。先生は一人で考えごとをしたいかもしれないし、つまらないことで話しかけるのは失礼だから黙っていよう。先生はかなり年齢も上ですし、偉い先生で、私のような若輩者が何かつまらないことを話しても、あまり楽しんでくださらないだろう。だから邪魔しないで黙っていようというふうなことも、一つ理由として挙げられるかもしれない。一方、こんな考え方もできると思うんですね。Bさん、この話しかけるといふほうの人ですけれども、同じ部屋にいるのに、黙っているとかえって緊張する。お互いに緊張するし、先生を無視しているようで失礼だと。だから何か話題を見つけて、話をしなければいけないというふうに考えることもあり得るだろうと思うんですね。ここでおもしろいのは、失礼だから黙っていよう、話しかけることは失礼だ、だから黙っていようという考え方もあり得るし、もう一つは、話しかけないと失礼だという考え方もあり得る。だから何を失礼だと考えるかという、いろいろな考え方があるということなんですね。これをちょっと、まずここで押さえていただきたいと思います。ここで、『論語』の教え、『聖書』の教えなんていうものを挙げましたけれども、『論語』にこんな言葉があります。「己の欲せざるところは人に施すなかれ」、自分がしてほしくないことは他人にもするなど

いう意味の言葉ですね。これは我々、我々といっても最近の若い人々は習わないのかも
しれませんけれども、かろうじて私ぐらいの年齢の人間が中学校なんか行きますと、こ
んなのを習ったりしたわけですね。ところが『聖書』には、なんか似ているようで全然
違うような、なんか不思議な言葉があるんですね。これは『新約聖書』のマタイ伝にあ
る言葉なのですけれども、「人にしてもらいたいと思うことは、あなた方も人にしてあ
げなさい」。『論語』の方では、してほしくないことは人にするな、『聖書』では、して
ほしいことは人にしてあげなさいというふうに言っている。これ、言っていることの方
向性は違うのですけれども、向いている方向は違うのですけれども、でも、言いたいこ
とは一つ同じなのではないでしょうか。人づきあいをうまく進めるためにいろいろな方
法があるだろうと思うのですけれども、結局、突き詰めてみると、この二つのことに集
約されるのではないかというふうに考えられます。一つは、相手に不愉快な思いはさせ
ないことですね。相手が目上の人だというふうに立場をわきまえて、相手の立場を邪魔
しないというふうなやり方が一つ考えられる。それともう一つは、相手に積極的に働き
かけることによって、気持ちよくしてあげよう。この二つのことが重要なんですね。と
ころが、この二つのことは、実はお互いに矛盾することですね。同時にすることはでき
ません。相手に働きかけをするということは、それは下手をすると相手に不愉快な思い
をさせてしまうかもしれないというふうなこともあるわけですね。ただ、そのどちらを
優先するか、第1の要件、第1のやり方と第2のやり方、お互いに矛盾するわけで、同
時にはできないのですが、どういう場合にどっちのやり方を優先するかということは、
これは人により、国により、文化によって違っているのではないか。ただし、優先順位
は違うのだけれども、この二つのやり方が心の中にあるという点では、どの文化も、ど
の国も同じ。日本という国は、どちらかというとも1番目のやり方のほうを重んじる、そ
っちの優先順位を高めにするという傾向があるということが言えるかもしれない。さて、
中国の学生、中国というのは、むしろ下の方の、相手に働きかけて気持ちよくさせる
というふうな方を重んじるような傾向がやや強めな文化であるということが言える。実際
に、私も中国人の知り合い、何人かに聞いてみたのですけれども、先生を誉める、先生
の授業はよかったですというふうに誉めることは、決して中国では失礼なことでもなん
でもないんだというふうなことがあるようです。では、一番最初の誉めるという話題に
戻ります。誉めるって一体どういうことなのでしょうという。これは、言葉の本質的な
意味、意味の中心的なところを取り出してくると、こういうことが言えると思うんです
ね。相手のよい点を積極的に認めてあげる。評価してあげるんだということ。そのこと
で、相手をいい気分させるというふうなことがその結果として出てくるだろう。です
からこの誉めるという行動は、人間関係をよくするための行いであるということが言え
ると思うのです。ところが、誉めるという行動には一つ危険性もありまして、先ほど、
誉めるということは評価だという言い方をしましたけれども、評価というのは、上の者

が下の者に対してするものだというふうな考え方が一つあるだろうと思うんですね。先生が生徒を誉め、評価する、あるいは親が子どもを評価する、誉めてあげるというふうに。ですから、誉めるという行動をうまくやらないと、なんだ、おまえは自分よりも偉いものだというふうに分かっているのかというふうに分かられてしまう可能性がある。それからもう一つ、皮肉とか嫌味になってしまう可能性がある。これはどう皮肉になるか嫌味になるかということはあとでまた扱いますけれども、やり方をうまく、誉め方をうまく工夫しないと、誉めたほうの人間が想像しなかったような言外の意味が出てきてしまうこともある。このことによって人間関係を悪くしてしまう可能性もある。そういう行動だと思うんですね、誉めるという行動は。だから、誉めるということは、まさに両刃の剣、うまくいけば人間関係をよくすることができるのだけれども、ちょっと失敗すると自分を傷つけてしまう。相手と自分との人間関係を悪くしてしまうという、そういう可能性もある、ちょっと怖い行動なのだということが言えると思います。さて、ここでいきなり「人間、それはヤマアラシ」というスライドを出してしまいましたが（スライドB）、ヤマアラシというのはこういう動物ですね。ハリネズミとも言いますが、なんかこういうリスみたいな、大きさはちょっとよく分からないですけども、こういうちっちゃい動物に、針がチクチク、チクチクとこう生えているわけですね。ショーペンハウエルという哲学者の書いている^{くわわ}寓話にこういうのがあります。ある寒い冬の日、ヤマアラシが寒いのでお互いに温め合おうと思って、お互いに近寄って体を温め合おうとした。ところが、近寄るとこの針でチクチクチクッと刺されて痛いわけですね。だから余り近寄りすぎるわけにいかないんですよ。そこで、チクチク針で刺さないように離れていこうとする。そうすると寒いんですね。くっつく痛い、離れると寒いというので、なんかこういうくっついたり離れたりということをくり返しながら、最終的には相手を、お互いを傷つけもせず、そこそこ温め合える距離を見つけ出すことができたという、そういう寓話をショーペンハウエルという人が紹介しているわけですね。人間の人づき合いというものもこのようなものではないでしょうか。近づきすぎるとお互い傷つけ合う、しかしそれでも近づかずにはいられないという、何か安ものの青春ドラマに出てきそうなせりふですけども、こういうものだと思うんですね、人間の人づき合いというものも。ですから傷つけ合いもせず、かつ温め合えるためには、お互いどういふふうな距離をとった方がいいのかということ、人間同士がつき合う時もいろいろ考えていかなければならないということが、ここで言えるかと思うのです。もう一回最初に戻って、先生の誉め方ということなのですが、先ほど、先生を誉めるということ自体いけないのかという話をしましたけれども、そんな簡単なものでもないと思うんですね。日本の文化の中でも、先生を誉めてオーケー、差し支えないということもあるだろうと思うのです。例えば、「先生、そのネクタイ、お似合いですね」というふうにネクタイを誉める。かなり年配の先生だと、服装のことなんか誉めてという

ので怒るかもしれません。けれども、ネクタイの趣味がいいというふうに誉める、これは、現在の日本の文化の中では特に問題にはならないことだろうと思うんですね。「先生、料理がお上手ですね」、これもまあオーケーだと思います。その先生のお家に招かれたら、先生が御自分でおいしい料理をつくって待っていてくださったとします。そうしたら、先生がわざわざつくってくださったということに対して、何か一言言わないと、これはやはり失礼ということになるかもしれない。ところが、ちょっとまずいという例もあります。さっき挙げた例で、「先生、授業がお上手ですね」と言うのはどうもよくない。それからもう一つ、料理がお上手ですねという言い方でも、料理の先生に対して言う、これはやはりまずかろうと思うんですね。料理の先生に対して、「先生、料理がお上手ですね」と言うのは余りよくない。そうすると、どういう時にオーケーで、どういう時にだめなのか。まず、この例を見るとなんかちょっと見えてくるものがありますね。一つは「できて当然のことをわざわざ言う」、ということは決して相手を気持ちよくさせるという意味の、本来の誉めるということにはならない。さっきもお話がありましたけれども、例えば、「お箸、使えるんだあ」というふうに言ってあげるというようなことがありますね。お箸なんて別にそんなに難しいことでもないのに、なんでこんなにわざわざ誉めるんだらう。それからあとよく言われるのは、たった一言しか話していないのに、「こんにちは」しか言っていないのに、「日本語おじょうずですね」と言われてしまうというふうなこと。これも、聞き手にとっては非常に違和感を持ってしまう、ということが言えるだろうと思うのです。もう一つ、明らかにうそと分かるような誉め方をするとということもあると思うんですね。仕事に失敗したときに、「なんだ、こんな仕事を失敗してだめじゃないか」というのではなくて、「まあ、立派なお仕事をなさってねえ」と言われると、これは直接ストレートに怒られるよりもぐさっと胸に来ますね。というふうなこととか、あるいは、明らかに的外れな点を誉めるということもあるだろうと思うのです。論文指導の先生のところ、論文を書いて持っていったところ、「ああ、字が上手だね」というふうに言われてしまう。中身がどうかということを知りたいのに、「字が上手だね」という、本来とは全然関係ないことを誉められる。こういうふうなことをすると、言葉の意味以外の言外の意味というのが出てきてしまうんですね。だから誉めるということは、やはり相手がちゃんと納得できるような誉め方をしなければいけない。相手が、自分自身ではここが多分誉めてもらえるなというふうなところをまず誉めるということが大事だと思います。もう一つ、場合によっては全然予測しなかったところを誉められてうれしいということもあるかもしれないのですけれども、その場合は、なぜそこが誉めるという行為に値するのか、なぜそれが誉められるのに値する行為なのかということが分かるような説明がやはりくつつかないといけません。そういうことが言えるだろうと思うんですね。だから逆に言えば、これを悪用すれば、相手をあえて不愉快な気持ちにさせたいというときには、こんなふうな手法を逆に使えばいいと

いうことになりすし、それからもう一つ、人付き合いをうまくしたいというときには、自分の言葉はこういうふうなものとして相手に解釈される可能性がないかどうかということをよく考える、ということが一つ大事ということが言えると思います。先ほど、できて当然のことを誉めるのはよくないのだということをお話しました。しかし先生にとって授業というのは、果たしてできて当然のことなのか。私は、いわゆる教師ではないのですけれども、先生らしいことを週に1～2回はしたりすることがありますが、授業というのは決していつもうまくいくとは限らないものでして、やはり先生としても教え方をいろいろ工夫することがあるんですね。今まで教えたのとちょっと違う教え方を工夫してやってみるということがある。それがうまくいくかどうかということは、やってみないとわからない。それがたまたまうまくいったというときに、学生がそのことを認めてくれて、「先生、今日の授業はよかったです」と言われれば、それはしみじみとうれしいものであります。だから先生も誉めてあげましょう、と私が言うのもおかしいのですけれども、決して先生を誉めることがよくないというふうに、誉めるという行為を排除する必要はないと思うんですね。先生の授業の誉め方についてなのですけれども、いろいろな誉め方があると思うのですが、「先生、授業がお上手ですね」って、これはまずかろうと思うんですね。先ほども出した例ですけれども。それで、「先生の教え方はとてもよかったです」、これはどうでしょうか、これもなんかちょっといまひとつという感じでしょうか。「先生の授業、とてもよかったです」、「先生の授業はとても分かりやすかったです」、「先生の授業はとても勉強になりました」、あるいは「参考になりました」と言うのでしょうか。下のほうに来るほど、何となくよくなっていくというような感じがしませんか？上の方は余りよくないけれども、下のほうに来ると、だんだん許容される度合いが強くなっていくという感じがしないでしょうか。(スライドC)これは、皆さんの中には、それは違うという考え方の方もいらっしゃるかもしれない。それは後で質問のときに出していただければいいと思うのですけれども、何が違うのでしょうか、上の言い方と下の言い方と。これは、先ほど、誉めるということは上の者が下の者に対する能力の評価というところにつながる可能性があるという話をしました。ですから、相手の能力に対して直接何か言うということ避けるようにすれば、逆に言えばオーケーになる可能性が高くなるということも言えるかと思うんですね。上のほうの二つというのは、これは要するに「お上手ですね」とか、「先生の教え方はとてもよかったです」、先生の能力そのものに対して何か言っているというのが上の表現ですね。それに対して、次の真ん中になってくると、先生の能力に対して直接何か言っているというのではなくて、先生の授業に対して何かよかったですとか分かりやすかったというような言葉を言っている。こうすると、やや許容される度合いが強くなっていく。もっといいのは、先生の授業に対して、授業に直接に何か言うというのではなくて、「先生の授業はとても勉強になりました」、「参考になりました」、つまり先生の授業を聞いて、私

自身がどう感じたか、自分にとってどう役に立ったかというふうに、相手に対して何かを言うのではなくて、自分に引きつけて言葉を言うようにする。そうすると、許容され、許される可能性が強くなってくると、こういうことが言えるのではないかということですね。もちろんこれは違う考え方もできると思うのですが、異論がある場合はまた後で出していただければと思います。まとめに入ります。今日はいろいろなことをお話ししてきましたけれども、結局はこういうことですね。何か違和感を感じた、他者の、ほかの人の言動に対して違和感を感じたというときに、間違っているよとそれを否定するのではなくて、なんでそれをおかしいと感じるのだろうと、いろいろ自分の頭の中で可能性を考えてみましょうということなのです。そういうふうにすることによって、新しい発見というのが出てくるだろう。今は日本語ブームというふうに言われていまして、日本語に対する関心が非常に高くなっている。そのことは非常にいいことだと思うのですが、一つ心配になるのは、例えば、最近の若い者の言葉はけしからん、あるいは、外国人は礼儀知らずだ、こういうふうなことをした、こういうふうな言葉を言ったというふうに、違和感が相手の否定に直結してしまう。そういう可能性がひょっとしたらあるのではないかということをお心配するわけなのです。何か違和感を感じたときに、だからだめだというふうに言うのではなくて、ぜひその背後にあるもの、それから、なぜ自分がそれを不愉快と感じるのかという、自分側の事情をいろいろと考えてみるということが、これからの社会、日本の社会の中では非常に大事になってくるのではないかというふうに私は感じているわけです。これで、私の話は終わります。ありがとうございました。(拍手)

「英語（アメリカ）話者からみた日本語の誉め言葉」ポリー・ザトラウスキー （配布資料：p. 10～13）

司会 それでは、続きましてミネソタ大学准教授、国語研究所滞在研究員のポリー・ザトラウスキーさんから、「英語（アメリカ）話者からみた日本語の誉め言葉」と題しましてお話しいただきます。お願いいたします。

ザトラウスキー ただ今御紹介に預かりました、ミネソタ大学のポリー・ザトラウスキーです。どうぞよろしくお願いたします。それで、今日は「外国人・学習者の視点、実際の体験からのコメント」ということですが、それに関して二つお断りしたいことがあります。一つは、学習者の視点から話すということですが、私はもう 20 年ぐらい日本語と言語学を教えておりますが、いまだに日本語の学習者なんです。これは、日本語がアメリカ人にとり難しいからという理由ではなく、外国語全般、さらには言語というのは、一生勉強するものだと思っているからです。それからもう一つお断りしたいことがあります。外国人の立場からというようなことですが、私はすべての外国人の代表者でもありませんし、アメリカ人の代表でもありません。ですから今日は、たった一人

の日本語学習者としてお話しします。それでは、お手元の資料の 10 ページをご覧ください。ここの画面にも同じものがありますが、今日は、「英語（アメリカ）話者からみた日本語の誉め言葉」についてお話しします。まず、なぜこのテーマを選んだのかといえますと、先ほど金田さんは、日本人に誉められて違和感を持つ学習者がいるとおっしゃっていました。それから、宇佐美さんのお話にありましたように、日本では目上が目下を誉めることが多いのですが、逆に目下から目上を誉めることは余りないのですね。でも、私の経験では、日本人は目上に対しても目下に対しても同じように直接誉めることがあります。それはどういう場面かといえますと、学習者を誉める場面です。つまり、学習者の日本語を誉める場合ですね。学習者は、年齢、地位にも関わらず、誉める対象となるのだと思います。それで、今日は学習者の視点ですが、学習者は1回目に誉められたときと、100回目に誉められたときの反応が違うということを念頭に置いていただきたいと思います。学習者というのは、1回の発話、つまり一つだけの発話がずっと気になり、悩み続けることはありません。悩むのはむしろ、日本人に接したときのやり取りの中でいろいろ経験することです。日本人と接すればするほど様々なことを経験しますので、その内容も違ってきます。いろいろの場面で日本語を学習していきますので、今日は五つの場面を使って学習者が日本語を習得する、学んでいくその時期についてお話しします。失礼して座らせていただきます。では、まず最初の場面ですけれども、「1 誉められてうれしいと思う時期」があります。資料の中には、【会話例 1】の文字化したものがありますが、このように、中のNは日本人、Aはアメリカ人の発話となっています。これは実際の会話からとったものです。

【会話例 1】 (N=日本人の女性、A=アメリカ人の女性)

Aの専攻(日本語、美術)

(…)

- 1 N : 学//校—
 2 A : 学校へいきました。行き//ました。
 3 N : は—ん。//{笑い}
 4 A : {笑い}
 5 N : あ、でも、日本語うまいですね。
 6 A : いえ、いえ。{笑い}
 7 N : いや{笑い}、ほんと—。
 8 A : う—ん、「うまい」は？
 9 N : 上手。
 10 A : あ—、いえ、3年生、M大学の3年生ですけど。

(Kato [Nakai] 1999:関連資料)

お手元の資料には四角で囲み、こちらの画面では赤い字で示してあります。誉めているところは赤い字で示してありますけれども、「あ、でも、日本語うまいですね」、または5N「いや、ほんと—」というふうに、日本人がアメリカ人の日本語を誉めています。ここでのAというアメリカ人は、本当に片言の日本語しかできませんので、誉められて

とてもうれしく感じているのではないかと思います。誉められるととてもうれしくなるわけですから、次に、自分から日本人を誉めてみようと思う時期があります。2番ですが、日本人を誉めてみようと思う時期です。それで、今日のお話のためにビデオを用意しましたので、ご覧になっていただきたいのですが、左側に日本人、右側にアメリカ人が座っています。ここで、アメリカ人は日本の焼き物について話していますけれども、日本の焼き物を誉めようとしている場面です。ご覧ください。

<ビデオ上映>

ここに【会話例2】の文字化資料があります。

【会話例2】 (N=日本人の女性、A=アメリカ人の女性)

日本の焼き物
(…)

- 1 A: あの、日本の一、(沈黙 1.6) ceramics は有名です。
- 2 N: うん、ですね。
- 3 A: 上手。{笑い}
- 4 N: {笑い}
- 5 A: 上手と思います。
- 6 (沈黙 0.9)
- 7 N: え、じゃー、日本のその一、焼き物に興味があって、
- 8 N: 日本に行くんですか？
- 9 A: うん。
- 10 (沈黙 1.1)
- 11 N: はーん。
- 12 A: はい。

アルバイト

- 13 A: あのー、(沈黙 4.5)Mで
- 14 N: うん。
- 15 A: アルバイトが、ありますか？していますか？

(Kato [Nakai] 1999:関連資料)

3 A 「上手。ハハハ」、5 A 「上手と思います」、このようにアメリカ人は一生懸命日本語を使って日本の焼き物を誉めようとしていますが、うまくいきません。日本人が4 Nで笑ったり、また、6で沈黙、0.9秒の沈黙が続いています。なぜうまくいかないのかといろいろ考えてみますと、一つは「上手」という言葉の使用だと考えられます。この「上手」は、自分より技術や能力が優れた人に対しては使ってはいけなからです。しかし、学習者は自分が誉められているのに、なぜ日本人を誉めてはいけなのかと、少し疑問に思ってくるわけです。そこで、3番目の段階へ行きますけれども、「誉められて、馬鹿にされていると思う時期」があります。どういうことかと言いますと、日本人と付き合っているうちに、あるパターンが見えてきます。それは、間違いをしでかしたあと、失敗したあとで誉められることが多いということですね。日本語能力の場合ですと、明らかに日本語の間違いをしたときに、「日本語がお上手ですね」。または、先ほど

の話にありましたようにお箸の使い方に関して言えば、お鍋を食べていてお豆腐をお箸で取ろうとしたときに、お豆腐を落としてしまうことがあります。そこで、そのあとすぐに、「お箸の使い方がお上手ですね。スプーンでも持ってきてみましょうか」と言われるわけです。つまり、そんなにお箸の使い方がうまければ、「スプーンでも持ってきてみましょうか」と言わないはずですね。このように、失敗した後で誉められることになりますので、馬鹿にされているのではないかと感じるわけです。この時期ではノイローゼになりがちですけれども。今からビデオをお見せしますので、特に誉められたあとAというアメリカ人が何をするか、その行動を見ていただききたいと思います。この右側のアメリカ人の男性は、誉められたのにとっても嫌になっています。その気持ちがどこに表れているのかをお考えください。

<ビデオ上映>

【会話例3】

(N=日本人の女性、A=アメリカ人の女性)

Aの日本語学習歴

- 1 N: 日本語は一、どのぐらい勉強、しているんですか?
- 2 A: うーん、あー、三年生です//けどー。
- 3 N: 三年生。
- 4 A: でも一、あー、四年ぐらい一、勉強しました。
- 5 N: 日本に行ったことは一。
- 6 A: あ、ありません。
- 7 N: あり、ないんですか。
- 8 A: はい。
- 9 N: すごく、
- 10 A: いいえ。
- 11 N: うまいです、ほんとに。
- 12 A: いいえ。
- 13 N: 一。{缶を開ける}
- 14 (沈黙 1.9)
- 15 A: 失、いた//だきまーす。
- 16 N: どうぞ。
- 17 A: {飲み物を飲む}
- 18 N: そうです//か。{飲み物を飲む}
- 19 A: うん。{咳払い}

Nのアメリカでの生活

- 20 A: あー、どれぐらい、あーアメ、どれぐらい、アメリカに一、
- 21 N: 僕ですか?
- 22 N: はい。

(Kato [Nakai] 1999:関連資料)

会話例を見ますと、9N, 11N, 「すごく、」「うまいです、ほんとに」と、見事に日本人はアメリカ人の日本語を誉めています。ここでアメリカ人が嫌になっているということがお分かりだったと思いますが、この会話のあとで、ビデオの中のアメリカ人にインタビューをしました。そのときに、やはり自分の日本語のイントネーションと発音は非常

に悪かったから誉められたのではないかとアメリカ人が言っていました。このアメリカ人は、嫌な気分になり、なるべく早く話題を変えたいと思ったのです。ビデオの中で御覧になったように、そこで飲み物の缶をあけて、「いただきまーす」と言って飲み物を飲み、それで更にならんと話題を、この最後の20Aで変えています。つまり、精神的に追い詰められて、その話題を避けるために新しい話題を提供しようとしているわけです。先ほど述べましたように、この時期にはノイローゼになりがちです。アメリカに帰ってしまう人もいられるかもしれません。でも、もう少し長く日本にしようと思った人は、自分が失敗したときに日本人が誉める、その行動を変えることはできませんが、逆にその行動を手がかりに、自分の日本語がどのくらいできるのかを推測することができます。周りの人にはなかなか日本語を直してもらえませんが、誉められたら間違いをしたこととなりますので、日本語の誉め言葉は日本語の習得の度合いの指標として使えます。つまり、「日本語がお上手ですね」と言われたら日本語がうまくないということになりますが、逆に「日本語がお上手ですね」と言われなくなったら、少し上手になったと感じるわけですね。そして、その時期を無事通過し、次の長い時期に入ります。4番ですけれども、「日本人の行動を観察しようと思う時期」。最初ですけれども、「a 誉め言葉と話題展開」が挙げられます。ちょっと時間の都合上、ビデオをとばします。【会話例4】の資料をご覧ください。ここで、Aというアメリカ人が、文部省の奨学金をもらって日本に行ったことについて話しています。

【会話例4】 (N=日本人の女性、A=アメリカ人の女性)

文部省の奨学金

(...)

- 1 N: 奨学金、あ、文部省からの奨学金//も難しいでしょ?
- 2 A: うーん。
- 3 N: (沈黙 1.2) もらうのは。
- 4 A: そー、
- 5 A: でもー、(沈黙 2.1) 9人だけー、何だっけー、とうぶんし、その文部省の。
- 6 N: あーはい、はい、はい。
- 7 N: 数人?
- 8 A: 9、9人だけー、と、登録、
- 9 N: 登録?
- 10 N: も、申し込む、申し込む、申し込むんですか?
- 11 A: 申し込む、あー申し込む、そー。
- 12 N: 申し込む。
- 13 A: 申し込んでー、3人、もらった。
- 14 N: へー???
- 15 N: すばらしいじゃないですか。
- 16 A: うー//ーん→。
- 17 N: よくできるんですねー。{笑い}
- 18 N: 頭がいいんですね。{笑い}

- 19 A : あー、そうです、ラッキーです。
 20 N : あー、よかったですねー。
 21 A : うん。

秋田での勉強（日本語、歴史、書道）

- 21 N : えー、じゃ、えっとー、秋田ではー、日本語だけ？

(Kato [Nakai] 1999:338-339、中井 2000:160-161)

13Aをご覧ください。「申し込んでー、3人、もらった」とアメリカ人が言っていますね。それに対して日本人はどう言うかという、「へえー、素晴らしいじゃないですか。よくできるんですねー、{ハハハ}。頭がいいんですねえ。{ハハハハハ} あー、よかったですねー」というふうに誉めています。このように誉めていますけれども、相手のアメリカ人はどうしていいか分からず、うまく答えられません。ここでのアメリカ人は、いわば日本人の誉め殺しに圧倒されてしまっています。つまり、逃げられなくなっているわけです。ここで話題転換に困っているのですが、誉めることによって次の話題を考えて、最後に日本人が、この最後の発話で話題を変えます。このように話題に困っているときに、日本人はよく誉めるわけです。最後の例ですけれども、「b 誉め言葉の位置と反応」についてお話します。日本人が会話のどの位置で誉めるのか、そして、それに対してどのように反応しているのかに関心移ります。実は私自身はこの時期にいると思っています。次の場面ですけれども、今度は日本人同士ですね。今度は、一つの誉めるモデルをお見せします。ここのPは日本人ですけれども、Pの日本での仕事について話しています。

<ビデオ上映>

【会話例5】

(P=日本人の女性、N=日本人の女性、)

Pの日本での仕事

- 1 N : あれ？日本では、なにのお仕事をやっていたん//ですか？ところで。
 2 P : あっ。
 3 P : えっとー、
 グラフィックデザインで//す。
 4 N : あーーーすごいで//すね。
 5 P : えーーー。
 6 N : //ふーん？
 7 P : あとー、まあ、ほかのこと
 ちょこちょこやってたんですけ//どー、
 8 N : ふーん？

(Kato [Nakai] 1999:204、関連資料)

では、【会話例5】をご覧ください。Pが3Pでグラフィックデザインの仕事をしていたと言ったことに対して、Nは4N「あーーーすごいで//すね」と誉めているわけですね。この発話4Nをよく見ていただきたいのですけれども、そこに斜め斜線、インターネットをなさる方はおなじみのダブルスラッシュというのがありますが、この斜め斜線

のあとの発話が次の発話と重なっていることを示します。つまりこの「あーっすいで//すね」の「すね」と同時に、Pが「えーっ」を伸ばして発話しているわけです。別の見方をしますと、Pが4Nの発話をさえぎっていると考えられます。このように、相手の話をさえぎることによって、誉める人が次から次へ誉めるのが難しくなり、つまり、さえぎることによって防止するということが考えられます。次の6と7では、Nの「//ふーん？」と重なって、Pが「あとー、まあ、ほかのこともちょこちょこやってたんですけ//ど」というふうに、自分のことを謙遜そんして言っています。では、最後のまとめですけれども、今日は日本語を習得する過程から見た誉め言葉についてお話ししました。最後のところを御覧になっていただきたいのですけれども、4bの「誉め言葉の位置と反応。→隠れた文化」のところですが、今日お話ししたように、発話と発話のつながりがとても大事なわけです。これはある種の隠れた文化と考えられます。文化というのは、その辺にある建物やその行動だけではなくて、このようなところにも表れています。もちろんこれは目に見えないだけに、習得がとても難しくなります。ある発話を取り出して考えるときにはステレオタイプになりがちですが、1個1個の発話のつながりは言語によって異なりますので、ここに文化があるのではないかと考えます。今日は誉め言葉についてお話ししましたが、実はこのような観察は、ほかのことに対してもしております。私、以前、日本語の電話の会話を分析し、その中で、アメリカ人と日本人が勧誘するときの行動を分析しました。それに違いがあるということが分かりましたが、もし興味のおありの方は、お手元の資料の13ページに参考文献を載せましたので、よかったら御参照ください。以上で、私の話を終わります。御清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 それではここで、15分間の休憩に入りたいと思います。御手元に配られたかと思いますが、質問用紙があると思います。そこに、質問等ある方は御記入いただいて、この15分の休憩の間に係の者が回りますので、その箱の中に質問用紙を入れてください。それから後ろのロビーのところ、『新「ことば」シリーズ』を含みます政府刊行物センターの展示販売をしておりますので、御利用ください。また国語研究所の刊行物も展示しておりますので、よろしければご覧ください。それから一つアナウンスなのですけれども、本日会場にいらっしゃっております亀山さん、木野さん、いらっしゃいましたら受付の方をお願いいたします。それでは、休憩に入りたいと思います。次の再開は3時45分からにしたいと思います。よろしく願いいたします。

<休 憩>

【質疑応答】

司会 よろしいでしょうか。それでは、質問のコーナーを始めます。たくさんの質問、それから御意見、ありがとうございました。できる限りお答えしたいと思います。では、

宇佐美さんからお願いします。

宇佐美 一つ、このような御指摘がありました。学校の先生からの御指摘だと思うのですが、**宇佐美** 一つ、このような御指摘がありました。学校の先生からの御指摘だと思うのですが、けれども、「今の学校は必ずしも授業の上手な先生ばかりではないという現状なのです。当たり前のことを誉められると違和感を感じますけれども、どのような状況を現状の中で、また、ほかのものとの対比の中で誉められているかということが関わってくるのではないのでしょうか」と。まさにそのとおりだと思います。私、配布資料の方に書きましたけれども、どのような誉め方をするといいか、どのような誉め方をするとまずいかというふうなことについては、マニュアル的な答えというのはないのだというふうに書きました。そこが実は一番大事なところでして、つまり、結局どういう誉め方をするといいかということは、相手の心の中が分からないと実は分からないということが言えるんですね。例えば新米の先生で、まだ授業自体に自信がないという人は、子どもに素直に「先生、授業上手だったよ」と言われると、それでも喜んでしまうということもあるかもしれない。それから、例えばベテランの先生で、いつもとは違う授業の新しい工夫をして、うまくいったと思っていたら、そこは全然違うところを誉められてしまったと。全然工夫していない、いつものルーティンワークの教え方のところを誉められてしまったとすると、「おまえ、そんなところじゃなくて、もっと違うところを見てくれよ」というような感じで、余りうれしくないということはあるかもしれない。それはやはり、そこが人間のコミュニケーションの難しいところであり、おもしろいところでもあると思うのですが、結局、誉めるという行為が危険性を伴う行為であるということやはり変わらない。どんな場合もそれはつきまとうことなんですね。それを、あえてその危険を冒すというところに人間のコミュニケーションの宿命があって、そこにおもしろさがあるというふうなことで、だからいろいろな状況によって適切な誉め方があるか、そうでない誉め方であるかということが変わってくるということは御指摘のとおりです。ですから、これはもう、だからマニュアル的にこうすればいいということをここで申し上げることはできなくて、経験を積むということも一つの方法ですが、ただその経験だけに頼るということでは余りにも効率が悪いので、考えるときのヒントとして、こういうふうな考え方をするとうまくいく、と言ってしまっただけではいけないですね、こういうふうな考え方をするといいのではないかという御提案を、今日のお話の中ではしたというふうにお考えいただければいいのではないかと思います。私一人で話してもなんですので、これで切り上げます。

金田 二つの質問にお答えしたいと思います。まず、先ほどの私の話の中で、「アクセント」という言葉を使いました。これはどういうことでしょうかという御質問です。それからイントネーションとの区別も分からないのでということでした。これはよく私たちが、アクセントというのは何なのかということを考えるときに紹介されるものに、「雨」と「飴」の違いというのがあるかと思います。「あめが降る」のときの雨というのは、最

初のほうの「あ」が高く、そのあとの「め」が低くなっています。でも、例えば「あめを食べる」、「あめをなめる」、キャンディですね。この場合は、最初の「あ」は低く、次の「め」は高いということで、高さ低さのアクセントの違いがあるということです。そして、イントネーションとの違い、区別ですけれども、例えばもういまは梅雨ですので雨が降っていることが多いわけですけれども、ふと外を見てみたら雨が降っていて、それを見て、「うーん、雨ですか」というふうに、気がついたという感じで言う場合と、外が全然見えないような状況なのに、雨のざあざあ降っている音だけがしていると。それをほかの人にちょっと確認するときに、「雨ですか？」というふうに言う。これは、イントネーションの違いなんです。「雨ですか」というふうに言ったときには、なんか下がって言ったという感じがしますが、「雨ですか？」と言うと、最後のところがふっと上がった感じがします。こういうのをイントネーションというふうに言います。それからこれは小河原さんに宛てての質問ともとれるものなのですから、「つまらないものですがなどの控えめな言い方は、やはり日本人特有の感覚であると思われる」という御意見ですね。そして、「ではそのような日本人の感覚を日本語学習者に理解させることまでが日本語の教授者に求められるか否かは難しい問題であるかと思えます」と。おっしゃるとおりだと思います。そして「日本語学習と学習者のアイデンティティとのバランスをとるためには、どのような点に留意したらよいでしょうか」という御質問です。この日本語学習者に理解させる、日本人の感覚、あるいは日本の文化、伝統文化というふうに言ってもいいかもしれませんが、これを理解させることまでが日本語の教授者に求められるかどうかなのですが、こういった違う文化、自分の持っている文化とは異なる文化の行動ですとかあるいは言葉などに、学習者がどのように接するかということで、三つのことがあると思うんですね。これは頭で知識としてその違いを理解するというのと、自分の気持ちの中、心でその違いを納得するというのと、そして、納得するだけでなく、自分も同じようにやってみる、行動をとるという三つの段階があるかと思えます。これは、この御質問をなさった方がおっしゃるように、学習者のアイデンティティと深く関わりがあるところですので、気持ちで納得できないものを納得せよと言っても、納得できないものはできない。ましてや、行動なんかには移せないという場合もあるわけですね。無理に行動に移そうと思ったり、納得しようと思ったら、それこそ、先ほどのポリーさんのお話にあったように、ノイローゼに陥ってしまうかもしれないわけです。これは教授者の立場というのはそれぞれお考えが違いますが、ここは私はこうあるべきだということは申し上げません。ただ、こういった三つのことを考えて学習者に接するということは、教授者にとっては大事ではないかなというふうに思っております。では、私はここまでということで。

ザトラウスキー 私のところには、2種類のこのような質問が来ております。一つは、「誉められたら逆にノイローゼになってしまう気持ちが起こることは驚きました。学習者が

そのような時期にあるとき、日本語を教える教師としてはどのような工夫をしているのか知りたいなと思いました」と書いてあります。それと、あと、「このノイローゼについてもう少し詳しく具体的な解決案を教えてください」というようになっているのですが、いろいろな方法はあると思いますが、一番困るのは、学習者がノイローゼになっているにも関わらず、だれも知らないということだと思います。日本語教師は、教室での日本語教育をしているときは、学習者がどのような行動をしているのか分かるのですけれども、いっぺん外に出て普通の生活をしているときの学習者の悩みなどは、実際に一緒に行動しないと見えてこないことがあります。日本語教師が学習者と一緒に行動したり、また、友達がいればその学習者の友達にいろいろアドバイスしてもらったりとかすることは一番いいと思います。このノイローゼになったときは、話し相手がいなくて一番困るんですね。割と関係ないことが多いので、周りの日本人が声をかけてこないとか、自分一人で悩むことが多いので、だれかそういうちょっと心配してくれる人がそばにいととても助かります。ほかの方法として、もう一つの質問とも関係があるのですけれども、最後の「隠れた文化」について、もう少し具体的にということですが。最後のところで、発話と発話のつながりで隠れた文化があるのではないかというお話をしました。例えば日本人の会話の中でも、誉められたときに日本人が、重なって「いいえ」、【会話例5】では「ええ」と言っているのですけれども、相手の誉め言葉と重なって、それをさえぎって話を先へ持っていくことが多いですね。日本語教師が学習者にそういう発話をさえぎる技術を教えることも一つの方法だと思います。また、先ほどの【会話例4】に戻りますけれども、これは誉め殺しされた例ですけれども、この学習者は、まず、「すばらしいじゃないですか」と相手の日本人に誉められます。ちょっと圧倒されて「あー」と言っているときに、日本人がそれと重なって「よくできるんですね」というふうにさらに誉めているんですね。学習者は言葉がなかなか出てこないで、どんどん誉められていくのですけれども、こういう重ねる技術、相手の発話と重なって、自分の「いや、ただラッキーでした」のようなことを言うことを、先生に少し教えてもらうのも役に立つのではないかと思います。その「隠れた文化」ですけれども、発話と発話のつながりがとても大事なものです。日本人が生まれてからずっと行動しているというか、やり取りの中で、いろいろな技術を身につけてくるんですね。ですから、誉められたときに相手の話をさえぎって自分のことを謙遜^{けんそん}して言うとか、そういうことは割と身につけているものですが、それも一種の文化なのではないかと思います。学習者のもとの文化では、人の話をさえぎるのは失礼にあたるか、そういうようなことを考える人もいるかもしれませんが、そういう隠れた文化も習得することによって、もう少しうまくいくのではないかと考えます。以上です。

宇佐美 時間がちょっとあるようですので、もう一つの質問を取り上げます。相手に働きかけて気持ちよくさせるというやり方と、それから相手に不愉快な思いをさせないよう

にするというふうなやり方とは、矛盾しているようには思えないんだけどもという御質問です。矛盾しているというよりも、消極的か積極的かの違いなのではないかという御質問なのですけれども、これは多分私の説明の言葉が足りなかったということだと思います。同じ場面、例えば先生と二人きりになってしまったという同じ場面で、どういう行動をとるか。例えば先生に話しかけるという行動をとるか、話しかけないというやり方をとるか。それはどっちのやり方を、つまり相手に働きかけるか、働きかけるのをやめるかという、どっちのやり方をとるかということで、実際の行動の仕方が決まってくるわけなのですけれども、片方のやり方をとってしまうと、もう片方の方の、つまり相手に話しかけるというふうなやり方をとってしまうと、それは常に、やり方を一つ間違えると相手を傷つけてしまう、相手を嫌な気持ちにさせてしまうかもしれないという、そういう危険性をはらんでいるということですね。逆に、相手に話しかけないというふうなやり方をとると、それは相手を気持ちよくさせるというふうな方策はとれないということで、だから相手に話しかけるというやり方の方は、必ず矛盾するという、相手をいやな気にさせないということと必ず矛盾するというわけではなくて、常に矛盾する危険性を持っているということなんですね。だから必ず矛盾するというふうにとられてしまうと、それはちょっと、確かに違う。矛盾しない場合も確かにあります。社会学の方では、コミュニケーションというのは相手のメンツを脅かすかもしれない行動だというふうな解釈の仕方をするんですね。結局、私が話したかった、さっきの質問に対する答えについてもそうなのですけれども、何か人間が行動を起こすということが、うまくいけば相手を気持ちよくさせることができるかもしれないけれども、下手をすると相手を嫌な気持ちにさせてしまうかもしれない。そういう二面性を持った行動であるという、そのことを常に我々は認識、よくわかりつつ行動をとっていかないと、私は本当はこういうつもりだったのだけれども、相手は違うふうにとってしまった、これは心外だというふうな感じで、逆に自分の方が不愉快になってしまうというふうなことがある。そうではなくて、常に何か行動を起こすということは、自分が予期しない結果を引き起こす可能性があるのだということ認識しておく必要があるということ、私は言いたかったということです。以上です。

司会 たくさんの御質問、御感想、ありがとうございました。すべての質問には答えられませんが、当研究所では電話質問というのをやっております。いま、そちらの左側に電話番号が出ておりますけれども、もし何か、本日のフォーラム以外のこと、フォーラムに関すること、なんでも構いません。電話等で御質問いただければと思います。それでは、そろそろ閉会の時間になりました。一つお願いがあるのですけれども、御手元にアンケートの用紙があるかと思えます。今後、皆様からの御意見、御要望等を参考にさせていただきます。このフォーラムを更にいいものにしていきたいと考えておりますので、ぜひお帰りの際にはアンケートに何か御記入をいただいて、回収箱の方に入

れていただきたいと思います。それでは、今日の第 15 回「ことば」フォーラムを閉会
いたします。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

<終了>